

poem 1

by aono

photo by hiros



薄紫の紫陽花は、青春を思い出させる

湖畔にひっそりと一本咲いていた紫陽花は

薄い紫に奥ゆかしさを秘めて

湖で出会ったあの人と重なる

たった一日の出会いだった

どこの誰かも知らない

その後 何をしているかも知らない

私の脳裏に鮮烈な印象を残して去ったあの人との出会いは

大事な青春の一コマだった



久しぶりに故郷へ帰って来た

幼い日に遊んだ野原に

白いすずらんが静かに咲いていた

あの頃、一緒に遊んでいた女の子はどうしているだろうか

あの子が花嫁さんで僕が花婿さん

すずらんを頭に飾って遊んだっけ

僕は照れくさくて すぐ捨ててしまった

あの子も もうこの白いすずらんのようなブーケを持って

本当のお嫁さんになったかな



「おねえさん また人間が来るみたい」

「そうね、そんな匂いがするわ」

「どんな人が来るのかしら」

2人は顔を持ち上げて 登山道を見おろした

「私たち 摘まれてしまうかしら」

「大丈夫 そっと見守ってくれるだけ」

「わかるの？」

「ええ、風が教えてくれるのよ」



同じ親から生まれたのに

なぜか違う僕たちふたり

兄さんのはのっぽで 僕はずんぐり

かんがえてみれば あたりまえだよ

兄さんと僕とは 別の人間なんだもの

姿かたちも、考えている事も

違わなければ おかしいよね

僕たち2人は個性の違う なかよし兄弟



何年ぶりだろうか

君に会って驚いた

白い野ばらのようだった君が

別世界の妖精のように変身していた

風に吹かれれば 飛んでいってしまいそうだ

何があったのかはわからない

時が君を変えたのかもしれない

僕が言える事は

昔も今も 君は相変わらず僕を魅了する

ただ それだけだ





吹き上がる噴煙の下で

心臓がドクンドクンと鳴っている

赤い血潮が騒いでいる

侵入するものがいれば 即座にその血潮で溶かしてしまう

怒らせるものがいれば 血潮は奔流となって外にあふれ

全てを破壊してしまう

あらゆるものが灰となるまで



貴方と私はずっと一緒に過ごしてきました

長い長い年月でした

時には嵐もありましたが

二人で荒波を乗り越えて

ここまで共に生きてきました

家族が増えてまた減って

代わる代わる船の舵をとりながら

貴方と私はずっと一緒に過ごしてきました

残されている時間は少ないけれど

これからもよろしくお願いしますね

あ・な・た





一度も訪れた事のない村なのに

何故か 懐かしさがこみ上げる

故郷という言葉が似合う村を

丘から眺めるだけで ほっとする

故郷を持たない私をも まるごと包んでくれそうだ

都会からはじき出された私をも そっと迎えてくれそうだ

そんな思いがこみあげる

私の気持ちを察するように 菜の花を揺らしながら

風が私の頬を微かになでて そっと通り過ぎて行った



ヴァイオレット すみれ色

堇は紫色だと長い間思っていた

ヴィオラやパンジーには色々あるが

色の名前になるくらいなもの

濃淡はあっても堇は紫色そう信じていた

ある日 白いスマレを見つけて

はっと息をのむ

紫色の中に一輪の白いスマレ

それはあの人を初めて見た時と同じ感覚

ひと際目立った清楚な彼女

あの人にあこがれた若い日

ふと懐かしく思い出した



私たちは薄いクリーム色の小さな花

岩陰にひっそりと咲いています

もし秋口に山に登ったら

岩場や礫地で足元を見てください

私たちがいるかもしれません

決して踏みつけないでくださいね

そのくらい小さいのです

昔はこれでもお薬として皆様のお役に立っていました

今は 私たちを愛でてくれる人のほうが多いようです

とても幸せに思えます

これからもずっとこのままでいたいと願います